

## 英語の読みとは

竹 中 龍 範

一般英語の授業で、学生の読解力について不安を覚えることがしばしばである。日本語に訳せば、というより、英和辞典にある訳語を順序を変えてつなげば、それで解釈できたと思込んでいる学生のなんと多いことか。ある文を訳させてみると何とか努力のほどは見せてくれるが、さて、それはどういうことなのか自分の言葉で述べるように指示すると、もう駄目である。例えば、therefore が出ると「それ故に」と日本語を充てるが、何故になのかさっぱりわかっていない。このようなことの繰り返して100分が過ぎる。一体、本当に理解できているのかどうかと、時にしつこく追求するので、中には、指名されると「訳はできますが、わかりません」と答える者もいる。そんなものは訳でもなんでもない、と口をすっぱくして言っても、5分もすれば正体のない he が「彼」として再登場してくるような始末。まさか、これを中学・高校のせいにする訳にもいかず、どう指導したものかと頭をかかえてしまう。

そもそも読解力とは「1分間読語数 (w. p. m.) × 理解度 (%) ÷ 100」で求められるが、1分間に読める語数は極めて少ない超遅読で、そのうえ、理解度たるやあるのかないのかわからない状態で、果たしてどれくらいの読解力があるといえるのか。読語数はさておき、理解については厳密な測定が困難なため、測定結果を基に指導法を検討することは容易には行えない。ただ、英文の理解を困難にしている要因は幾つか考えられるので、それを検討すれば適当な対策が立てられよう。

学生の読みの傾向として、まず、第1に挙げられるのは文読みである。1文単位で読むために、文相互の関係が掴めず、パラグラフの構成が捉えられない。日本人は接続詞の使い方が下手だといわれるのも、裏を返せばこのためだということは容易に理解できよう。これは何も接続詞に限ったことではなく、例えば、日本語について書かれている文中に the language と出てきたら「その言

語」ではなく「日本語」と解せねばならないし、また、thus という副詞の訳よりも、その指す内容がわからなければならない。2, 3 ページ遡らなければわからないものもある。文読みに捕われていたのではそういう読みは不可能である。

一方、振り返りも理解を妨げる要因となる。これが日本人にとって便利な方法であることは否めないが、どうしても不合理性を醸し出す。例えば、英語の原文では代名詞が承前指示の原則に従っているのに、訳文ではそうはならない、というような場合が珍しくない。また、この振り返りのために、文脈が流れとして掴めず、文読みのレベルにとどまらざるを得なくなる。直読直解の力が真の読解力であることはここで殊更述べる必要もあるまい。

この文読みと振り返りなどが阻害要因のすべてではないが、これが取り除かれないと、いくら他の要因を排除しようとしても効果はない。視覚域の拡大云々を言ってみたところで、振り返りのなされているところでは何ら意味をなさない。具体的な指導法とも併せて、今後なお検討すべき課題である。

## 私のオリンピック

村 田 直 樹

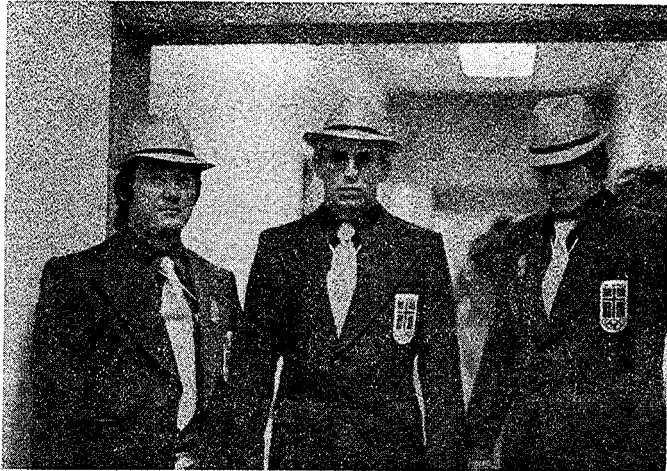
講道館より派遣されて二年目の夏、そこには大きな競技会が待っていた。第二十一回モンテリオール五輪競技大会がそれである。私が派遣されたアイスランドは、未だ柔道選手をどのオリンピックにも送ってはいなかった。五輪選手団の中に入るには、条件を充たさねばならない。柔道の場合、「<sup>註1</sup>北歐柔道選手権大会優勝、もしくはそれに準ずる成績を挙げた場合、考慮の対象とする」というものであった。(註1 スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、デンマーク、アイスランドの北歐五カ国よりなる試合)

滞在一年目が過ぎ、現地柔道界の状況もようやく判り始めてきた二年目、私はオリンピックを意識し、一方でその前にまずやって来る北歐柔道選手権に焦点を当て、活動を開始した。大会は早春三月、スウェーデンのゴイタボルグにて開催される。私はクリスマス休暇を返上させ、ナショナルチームをトレーニングした。休暇はきちんととるお国柄故に、反発があった。しかし私は委細を構わずトレーニングメニューを消化させていった。外野のかまびすしい声には耳を貸さず、自ら先陣をきって練習に明け暮れ、私は燃えに燃えたのである。そして私の鍛えた選手は勝った。スウェーデンから一路、大西洋を北へ向けて飛ぶ帰りの機内では選手団みんなが祝杯に酔った。私は嬉しかった。アイスランド柔道連盟会長及び役員諸氏より花束を贈られての凱旋帰国は今もこの胸に残る爽快な思い出の一つとなっている。アイスランド柔道界が遂に五輪行きの切符を手にしたのだから。選手二名、コーチ一名がその通達の内容であった。かくして私もアイスランド柔道界も初めてオリンピックの舞台へ進出することになった。

さて、以下は、講道館へ報告した当時の観戦記から――。

『モンテリオール五輪柔道競技は、大会も後半の七月二十六日より六日間にわたって行なわれた。私はアイスランド五輪選手団の柔道コーチとしてこの大

会に臨んだ。アイスランドからの柔道選手は二名であり、軽重量級と中量級であった。アイスランド柔道としては記念すべき初の五輪大会である。



1. アイスランド代表柔道選手と筆者。 於モントリオール選手村。

我々は五輪選手強化の為のハードトレーニングを行ない、合宿を重ね、とにかく稽古相手に恵まれぬこの国だが、やれるだけの事をして五輪大会に備えた。

しかし、世界の壁は予想通り厚く、共に緒戦で敗れた。一人は巨大な会場の雰囲気に吞まれ、集中を欠いてしまった。米国代表選手に試合開始早々、背負投でももの見事にほうられた。もう一人の選手は善戦してくれた。スペイン代表のヴェテラン選手を相手によく勝負し、「有効」一つを取られて敗れたが、悔いは無かった。試合後、

「大外刈のいま一步という所迄いけた。自分でもそこ迄は好い感じで入れた。」

「しかし、そこから先がいけそうでいかなかった」と反省。

今後の研究課題を自ら悟った様である。彼は流れ落ちる汗を拭おうともせず、瞳を輝かせながら語った。私はそれらを「ウン、ウン」と聞きながら満足な気持であった。

五輪柔道競技は重量級から幕があげられた。我が遠藤選手は一回戦、ノビコフ選手（ソ連）と対戦し、判定で敗れた。ノビコフ選手はそのまま無難な試合運びで勝ち進み、遂に金メダルを獲得した。続く二日目からの軽重量級、三日目中量級、四日目軽中量級と連日、決勝戦は日本選手対ソ連選手となり、話題を独占した。試合結果は、二宮選手、園田選手は金メダルを獲得した。



2 重量級日本代表遠藤選手と筆者。於モントリオール郊外。

私は、世界選手権（一九七五）、欧州選手権（一九七六）を通じてソ連選手の柔道を実際に見る機会を得たが、今大会を見る限り、従来言われてきた剛道振りは無かった。一見ノラリクラーリとした進退のノビコフ選手だが、姿勢はスラーリと立って悪くない。そして刹那にとび出す大外刈のスピードには、誰もが目を見張らされたに違いない。

昨年、世界選手権軽中量級二位のドボイニコフ選手は、今大会では中量級に出場した。彼は立っては肩車、寝ては崩上四方固を鮮かに極め、観衆を沸かせ

た。このクラスの有名選手が霞んでしまう程、高い技能を示した。

軽中量級世界選手権者のネフゾロフ選手は再び蔵本選手と顔を合わせた。会場に詰めかけた日本人の誰もが蔵本選手の雪辱を願っていた。緊張のうちに決勝十分の試合が始まった。両選手共似たような身体つきで速い。しかし、蔵本選手の仕掛けた背負投は不発であり、ネフゾロフ選手の技は効いた。左の低い沈み込む背負は電光石火といおうか、蔵本選手は三度横転させられ、「効果」、「有効」とポイントが重なり、最後組み際にとんできた背負は「技有り」と効いてしまった。

昨年の世界選手権以来、十字固の印象を強く抱かされてきた我々は、今、目の前で放たれているネフゾロフ選手の冴えた投技に、声を吞むばかりであった。ソ連勢の体力優位のみならず、かなりな技術水準をも見せつけられ、何となくこの日、我々は意気消沈させられたかたちだった、と言ったら言い過ぎだろうか。

そのムードがどう作用したかは知る由もないが、翌日の軽量級でこのクラスの第一人者南選手が一回戦不戦勝の後、二回戦、フランスのデルヴィン選手に敗れた。

試合開始後、両選手自護体の姿勢で組手争い。そのまま攻撃のチャンスを把まんとする微妙な駆引きが繰り返された。が、南選手攻めない。いや、攻められぬのか。そうこうするうちデルヴィン選手が仕掛け、もつれ合って寝技。手に汗握る寝技の攻防。立って南選手背負投。デルヴィン、ステップして必死の防禦、再び寝技。場外際でのこの攻防にデルヴィン選手、絞技で反撃した。両選手場外のため、主審「待て」の合図。しかし、南選手は直ぐに起き上がらなかつた。

「おや、どうしたんだろう？」

と不安な気持がよぎった――。

そして横になったまま、又、立ち上がって戻りながら、南選手は掌底で側頭部を数回たたいた。世界チャンピオン劣勢のムードに折から場内は騒然となっている。

再び主審の「始め」の声。その直後である。デルヴィン選手の必死の背負投

に南選手が横転した。「効果」と宣告。ワーッという大観衆の声。そのまま試合終了の合図。負けた。

南選手の蒼白な表情が痛ましく、我々はしばし、沈黙するばかりだった。

最終日は無差別級の試合が行なわれた。前日を悪夢とあって、この日は誰でも日の丸を挙げて貰いたいと願ったに違いない。そして我が上村選手はその願いを立派に叶えてくれた。並居る巨人選手を相手に、定評の安定した柔道で着実にポイントを重ね、決勝戦ではレムフリー選手（英国）を抑え込んだ。大会場のあちこちで、大小たくさん日の丸の旗が盛んに振られた。それ等は恰度、花が一時に咲いたように見事であった。

表彰台で金メダルを授与されると、上村選手は首から外し、それを手に持って後ろへ向きを変え、連日会場へ詰め掛け応援してくれた日本人観客席の方へ手を振って挨拶した。上村選手が鎖の部分を持っていた為、重そうな金メダルが振られる手の回りで飛び跳ねて踊った。その光景が何とも微笑ましく印象的であった。

五輪柔道競技はかくして、様々なドラマを演出し、熱戦の幕を閉じた。私は海外で柔道指導にあたっていらっしゃる先生方と同席しながら、勝って歓喜し、敗れてはガックリした。しかし、競技が終わってみると、大きな責務を果たし、



3. 五輪閉会式に於ける日の丸。

結果はどうあれ、この日の為にベストを尽して戦った選手団の皆さんに、「本当にごくろうさまでした」と、心から迎えてその労をねぎらいたい気持ちに変わっていた。

六日間の五輪柔道競技の熱戦を通じて、観客席のそこここで振られた日の丸の旗が美しかった。それらは試合場に臨む選手へのどれほどの励ましになったことだろう。振られる日の丸には表情があり、時には限りなく美しく、時には涙さえ浮べて痛ましかった。

私は所謂戦無派と言われる世代であり、国旗に対する認識など無いに等しかった。けれども、モンテリオールの競技場で見たあの日の丸の何と懐しく美しかったことか。何と温かく、かつ清々しいものであったことか。私はそれ等を見ながら感動を覚えていた。と同時に、今迄、何か大事なものを置き去りにしてきたような気持ちにさせられ、「しまったなァ……」と思わずにいらなかった。

これを機会に私は、人として、又、日本人として歩むべき道というものをさらに探求できたら、と願う。<sup>註2</sup>「心身の力を最も有効に使用する道」を遺して下さった先人の教えをかみしめながら。

(註2 嘉納治五郎師範遺訓「柔道は心身の力を最も有効に使用する道である。その修行は、攻撃防禦の練習によって身体精神を鍛練修養し、斯道の神髄を体得することである。そうして是によって己を完成し、世を補益するが柔道修行の究意の目的である。」)

\* 註1, 2ともに筆者

\* 観戦記は、講道館発行「柔道」10月号1976, 'オリンピック柔道競技の観戦海外だより'に掲載されたものを若干修正加筆した。